

平成 31 年 度

香川大学経済学部編入学試験

問 題 用 紙

小論文

4 ページ

【注意事項】

1. 監督者の「始め」という指示があるまで、問題用紙を開かないこと。
2. 「始め」の合図と同時に、すべての解答用紙に受験番号を書くこと。
3. 落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合は、黙って手を上げて、監督者の指示を受けること。
4. 問題の内容についての質問には応じないが、その他の用事があるときは、黙って手を上げて、監督者の指示を受けること。
5. 解答は、解答用紙に横書きで記入すること。
6. 解答を訂正する場合は、きれいに消してから記入すること。
7. 解答用紙及び下書用紙は、片面のみを使用すること。
8. 解答を書き終えた者は、黙って手を上げて、監督者の指示を受け、退出することが出来る。

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

人は生まれながらにして他人との比較をする習性を持った動物である。「幸福論」の一つとして①「相対仮説」というのがあるが、他人と自分を比較して他人より優位な状況にあれば幸福を感じるし、逆に劣位にあれば不幸を感じる。たとえば所得であれば、低所得の人は高所得の人をうらやましく思うし、逆に高所得の人は低所得の人に優越感を抱く。人間の身体能力、知能、容姿、性格などさまざまな特性において、不幸にして個人によって優劣の差を持ちながら人は生まれてくるので、これに関しても人びとは自分と他人とを比較しがちである。

所得の差が生じるのはこのような才能の違いが影響力を持つことは否定できないが、本人の努力の程度にかなりよるところもあるので、頑張らなかつたのは自分の非と思って低い所得へのあきらめがつく一方で、頑張った人が高い所得にありつけたのは自分の努力へのご褒美と思ってよい。

こうした努力によって生じる実績の差で説明できる所得格差に関しては合理性が高いし、人びとの許容するところでもある。しかし問題は、努力とそれに伴う実績・業績以上の所得格差の発生が生じることが多いことである。これは好ましくないと思う。なんらかの政策措置が必要である。

しかしながら、努力に伴う実績・業績以上の所得格差が世の中にあつたとしても、他人の高い所得を気にしないことができれば、そのような人に嫉妬を感じなくて平然としていられる。近隣に豪邸に住んでいる人がいて、その家の前を歩くたびに「うらやましい」と思う人がいるかもしれない。不遜なことを言うかもしれないが、意外とこの家庭はバラバラになっているかもしれない、自分の家は小さいかもしれないが、家族の結びつきは強いし平和な家庭であることが何よりの誇りとできるなら、豪邸などは気にならない可能性が高い。要は他人の優位を気にしない人は幸せである。

いや、どうしても自分は豪邸に住みたいと思う人はいてよい。しかし非常に豪華な家ではなくつつましい豪邸であることに限定したい。もとより私の個人としての好みは、うらやましく思わない後者の人であるが、人一倍の努力をして頑張つて、実績を上げてから高い所得を得て豪邸に住むことまで否定しない。そういう人がいるからこそ経済は活性化するのである、と私は思うからである。

このように所得の高低に関してはいろいろな解釈が可能であるが、問題は個々の特性の差である。頭のよい人がいればそうでない人もいる、美しい容姿の人もいればそうでない人もいる、身体能力の高い人もいればそうでない人もいるのが、人生の掟である。不幸なことにこれらすべてに、あるいは一つでも優れた素質を持って生まれた大変に恵まれた人もいれば、その逆の人もいる。

これに関しても私は他人との比較をしないように、と強調したい。生まれつきの才能、身体能力、容姿などは自分が希望して決められるものではないし、後天的に自覚することである。換言すれば「神」の決めたことなので、それに逆らわないことであ

る。もう少し具体的に言えば、他人との比較をするから自分の劣位が気になるのであり、他人と比較しなければ超然と生きていけるのである。

しかし比較をしないように、と言ってもかなり無理な注文であることは理解しているので、次のような手段が考えられる。逆の発想をして、自分の優れた点を見つけてそれを100%生かせる人生を送れば、たとえ他の分野で劣位のある人であっても幸せな人生を送ることが可能となる。自分の優れた点を見つけるには試行錯誤を経験するだろうし、まわりの人からのアドバイスも役立つことがある。長期間をかけて、じっくり自分を観察することに期待がかかる。

私が感動を覚えた事実があるのでそれを紹介しておこう。その人は、それはそれは玉のような美しい声をしていて、人を魅惑する声の持ち主であった。職業を聞くと、テレビやラジオ、あるいは映画などで吹き替えの仕事をしている声優であった。これこそが自分だけが持つ他人より優れた点を100%生かしていることの代表であり、その女性はきっと幸せな人生を送っているに違いないと確信が持てた。

不肖、私の経験も役立つかもしれない。子どものころは野球が大好きで、夕方遅くまで白球を追っていた野球少年であった。少しだけ野球の技術を持っていたので少年野球では多少目立っていた。将来はプロ野球選手になりたいという希望を持ち始めた。まずは野球で有名な高校への進学をも考えた。しかし身体能力や運動能力の不足は明らかであり、その道をあきらめざるをえなかった。

幸か不幸か勉強が少しできたので、第二の道は学者かな、ということ漠然と思い始めた。しかし大学受験には失敗して、希望する大学には進学できなかった。しかしこの失敗が逆にバネになったかもしれない、秀でた能力には欠けるかもしれないが、猛勉強して能力のなさをカバーしなければだめかもしれないと認識した。それと外国留学というリスクに挑戦したことも大きかったし、アメリカ人学生の猛勉強振りに接したので、自分だけが勉強に囚われているのではないと感ずることができて、安心感を持てたこともよかった。非常に生意気なことを言えば、他人のことは気にせず、自分の進むべき道を見つけたら、失敗を恐れずに邁進せよ、ということになるだろうか。

他人との比較をするな、に派生することになるが、自分の目標を高すぎるところにおくと、もしそれを成就できないことが起こると、人の落胆はすごく大きくなる。これは不幸の感情を抱くことにつながる。一方で目標が高くないとそれを成就する確率は高くなるので、成功したときのうれしさ、幸せ度は高くなる。

これを別の視点から考えると、心理学でよく用いられることであるが、期待の程度が高いとそれに成功できないときのショックは大きい、期待の程度が低いと、たとえ失敗してもショックの程度は小さいというメリットがある。一方で期待の程度が低いと、それに成功したとき、逆に喜びは大きくなるメリットがある。「多くを、そして高くを望まない」は「高い期待心を持たない」ということと同義とみなしてよい。

ここで一つの反論が考えられる。それは札幌農学校（現在の北海道大学）におけるクラーク博士の言葉であるが、「少年よ、大志を抱け」というのは日本人が好みとす

るところである。大きな志、ないし高い目標を掲げることが、努力をうながす要因となりうるので、人間にとって重要なことであるとの認識をする人が多い。

まさにこれらは私の考えに相對する考え方である。後者の思想を否定するものではないし、国や社会にとっては重要なこととなりうるのは認める。しかし、私は前者を好む。その根拠は、日本がすでに成熟社会に入っているので、高成長を求めるとか、といったことは期待されていないし、その必要性もない。したがって、やたらに高い目標を掲げて、それに向けて皆が頑張ることを要請することは成熟社会にふさわしくない。

明治時代のように日本が旧社会から脱却して近代社会をめざし、高度成長を求めるといふ合意が社会にあるのなら、「志を大きく」という目標は意義があるが、今や日本は近代化、高度化を達成した国なので、安心感のある社会の確保や不公平社会の排除、あるいは人びとの生活水準が低下しないという目標で十分であると判断する。

②ここで述べた私の思想には、きっと反対論があるものと予想する。日本における大切な論点として、議論の沸騰を望むものである。

出典：橘木俊詔『新しい幸福論』、岩波新書、2016年、209-215頁（一部変更）。

【設問】

問題 1

下線部①の「相対仮説」について、上の文章に沿って 100 字以内で説明しなさい。

問題 2

幸せな人生を送るにはどういう心掛けを持ちながら生活すればよいのかについて、筆者の考えを 300 字以内で説明しなさい。

問題 3

下線部②について、筆者の思想に対して提起されうる反対論をあなた自身で想定して述べなさい。そのうえで幸せについてのあなた自身の考えを述べなさい。字数は 600 字以内とする。